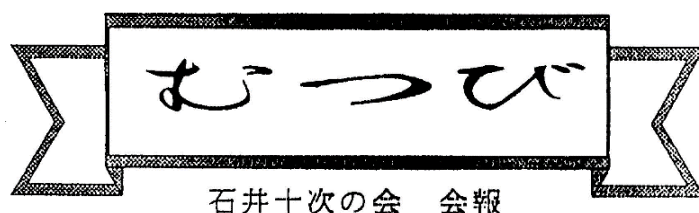


2024年
(令和6年)
1月1日



316号

新年のごあいさつ

～困難な時代、石井十次の精神と実践に学ぶ～

石井十次の会

会長 橋田 和実

皆様、令和6年明けましておめでとうございます。昨年の夏はことのほか暑かったようです。また、春と秋が少しずつ短くなっているような気がいたします。

今、世の中がだんだんと厳しい状況となってまいりました。地球温暖化の影響と思われる気候変動が激しくなり、世界的にも国内的にも大規模自然災害が各地で発生しております。新型コロナウイルス感染症も約3年間猛威をふるい、減少してきたとはいうものの未だに発生が止むことなく続いています。

さらには戦争や地域紛争も世界各地で勃発しており、それらの影響や円安によって我が国の物価が高騰しています。また、少子高齢化と人口減少が急速に進行しており、各種産業において後継者難や人員不足が生じています。一方、DX(デジタルトランスフォーメーション)化の推進によって、ITやAIの進展も著しくなっています。

私たちはこういった自然および社会的環境の変化にどのように適応していくかが課題となっています。

人類はこれまで幾多の試練を乗り越えてきました。したがって、絶えず希望をもって前向きに生きていく姿勢が大切かと存じます。人類社会は狩猟社会から農耕社会、工業社会、情報社会と進んできました。これからは「情緒社会」です。だといわれています。正しい精神、心の豊かさ、精神力を持って、前向きに生き抜く時代が到来していると思います。

明治から大正という日本が困難な時代に、石井十次は常に前向きに考え、自然を愛し、即断即行のもと、戦災孤児や自然災害難民の子弟を預かり、3000人以上の子どもたちを立派に育て、世に送り出しました。当時の状況下で、青少年の健全育成に果たした功績は偉大なものでありました。

私たちも石井十次の精神を学び、その実践を成すことによって、今の困難な時代を生き抜いていこうではありませんか。最後に、本年も石井十次の会に対するご協力とご支援をお願いするとともに、皆様の~~ご~~健康とご多幸をお祈りいたします。

～ルノワール作「ココの像」の真実～(その3)

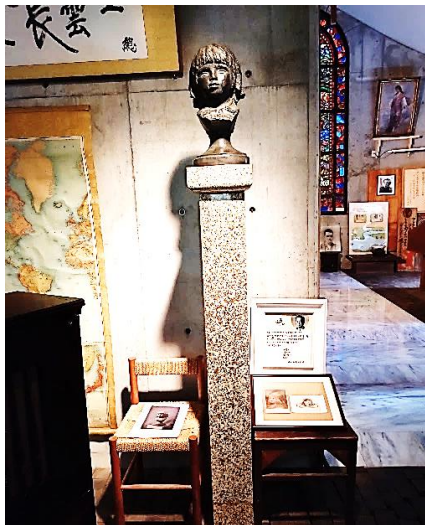
昭和54年(1979年)に、念願だった石井十次資料館が建設され、「ココの像」も資料館にしばらくして収納されました。

それから長い間、屋外(静養館前)の台座(児島虎次郎設計作)の上には何もない状態となっていました。

そこで、高鍋高校以来の友人である彫刻家・田中等氏に、児嶋草次郎理事長が依頼し、新しい石井十次の胸像が平成4年(1992年)7月19日に設置されました。この胸像は、資料館に展示されている石膏像を元にしています。



石井十次胸像(田中等作)
台座(児島虎次郎作)



ココの像(ルノワール作)
台座(田中等作)

「ココの像」の新しい台座は、彫刻家・田中等氏が、当時岡

山から運ばれて来て友愛社の敷地内に保管してあった石材(万成石まんなりいし)を使って制作しました。

「ココの像」が初めて石井記念友愛社の外に出たのは、平成11年(1999年)11月3日文化の日に開館した高鍋町美術館の「プチ・パリ展」に出品協力した時でした。

併せて「石井十次展」も開催されました。

この時、初めて「ココの像」の本物をご覧になった人々がほとんどだったと思います。「ココの像」を初めてご覧になった方は、「ココ」が可愛い女の子だと思われたことでしょう。

実は、「ココ」はフランスの印象派の画家 ピエール・オーギュスト・ルノワールの3男 クロードです。クロードは金色の巻き毛に紅い頬！！とても愛らしくて「ココ」という愛称で呼ばれていました。晩年のルノワールは「ココ」の肖像を多数描いています。資料館にある「ココの像」も、晩年の作品で、リューマチの手の痛みにも苦しみながらも、完成させたと言われています。ルノワールの子どもたちは3人とも男だったにもかかわらず、幼少期には全員長い髪にされていました。(当時の西洋の貴族の間では、男の子は命を落としやすいので、幼少期にはあえて女の子の服装をさせる風習がありました。)

ルノワールは3人の子どもたちを大変可愛がったと言われています。その後、長男ピエールは俳優に、次男ジャンは、フランス映画界の父と言われる程の映画監督に、3男の「ココ」ことクロードは、プロデューサーになりました。子どもを愛したルノワールの喜びが伝わってくるようです。

どうぞ、本物の「ココの像」や石井十次像をご覧ください。皆様のご来場をお待ちしています。

参考資料 川上典子様(柿原政一郎の孫)からの手紙

(編集委員 徳地 順子)

石井記念友愛社の福祉施設を訪ねて①～神武の家～

昨年8月に石井十次セミナーが開催され、児童自立支援施設の現状や地域の関わり方について学びました。交流会では、石井記念友愛社のいくつかの施設の関係者と懇談することができ、それぞれに歴史があり、子ども達の健やかな成長を願う特色ある活動に取り組んでいることに感心し、会員の皆さまにも是非紹介したいと感じました。今回は「神武の家」を紹介します。

「神武の家」は、神武天皇の生誕の地・高原町に西諸県地区で唯一の児童養護施設として、平成28年4月に開設されました。建物は、高原町民体育館分館（平成29年に国有形文化財に登録）をモデルに外装がデザインされました。玄関壁にある「神武の家」の表示に、♡（ハート）をデザインしてあるのが目に留まります。ある女の子が「友愛社の愛を意味する♡だよ。」と教えてくれました。こ



こでは、19名の子どもと23名の職員が生活しています。生活空間は、男の子は「ひまわり」、女の子は「さくら」、幼児は「どんぐり」と分けられており、これらの名称は、開設当時に入所した子ども達が決めたそうです。ここは「家」ですので、より家庭的な雰囲気子ども達を養育することを目指しているそうです。例えば、「今晚は、〇〇ちゃんが幼稚園で掘ったお芋をみんなで食べようね。」と声をかけて、献立に追加できるのも小規模な「神武の家」だからできます。また、毎月、近くにある狭野神社の清掃を、みんなでさせていただいているそうです。

これからは、他の施設も訪ねて皆様に紹介していきたいと思います。

（編集委員 西村さと子）



方舟館からの お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【延岡市】佐藤 民男 【東京都】柿原 明子

★作業の日

方舟館の前には樹齢約百年の銀杏の木があり、今年の秋も葉っぱが黄色く色づいて素敵な景色を見せてくれました・・・が、大変なのはその後。落ちた葉っぱの後始末です。だけど、大丈夫。友愛園の子どもたちが「作業の日」に、落ち葉の掃き掃除に来てくれます。すっかりきれいになって、お正月を迎えることができました。いつもありがとう。



この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

㊤ 884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会 TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuisya-jyuujinokai@kijo.jp

★編集後記

新しい年を迎え「むつび」巻頭に、西都市長 橋田和実様より玉稿をいただきました。公務ご多用の中、ありがとうございました。

（編集委員 西村さと子）